

7 黒い目の紳士

I

まだまだ歩いて行かねばならず クリマクロック・レーンの小道で
いちんち
一日仕事の落ち穂の束を降ろし わたしは靴下留めを結びなおす
そこへ優しげな黒い目の紳士が通りかかり こう言った
わたしの^{からだ}身体を バラ色に染める甘い声

「おやおや これは 5

なんと可愛い膝小僧ちゃん」

あの人は近づいて 靴下留めを結んでくれた

II

陽が沈み 月が出るまでのことだった
ああ 二度と手に出来ぬものを失う^{たやす}容易さ
あの優しげな行きずりの人の 家も名前も知らぬまま 10
でも その人の本性とその結末はすぐに分かった
わたしは激しく
泣きじゃくった

あの人が 靴下留めを結んでくれさえしなければ

III

いま わたしの^{そば}傍には 可愛い元気な男の子 15
あの^{こと}過失は世間も忘れかけ もう悲しくはない
わたしの一番の喜びはこの子 仲間で友だち
わたしをしっかりと守り 頼りにしているわ
この子のことでは泣かないし
いまでは感謝しているわ 20
この子のパパが 靴下留めを結んでくれたのを